

第5回 JIA 神奈川建築フォーラム 2021

これからの学校建築を考える

—多機能かつ安全でサステナブルな学校の可能性—

開催日：2021年10月31日(日)  
会場：横浜 象の鼻テラス(オンライン同時開催)



神奈川地域会  
田邊雄之

昨年10月31日、横浜の象の鼻テラスおよびオンライン配信にて、主催/JIA神奈川、共催/横浜市建築局による第5回JIA神奈川建築フォーラム2021「これからの学校建築を考える～多機能かつ安全でサステナブルな学校の可能性」と題したシンポジウムおよびデザインレビューが2部制で開催された。今回のフォーラムに際してJIA神奈川代表の小泉雅生氏より、以下のような開催意図が示された(一部抜粋)。

「社会状況をふまえ、これからの教育環境はどのようなべきか、最新の知見を持つ専門家とともに、考えてみたいと思います。同時に、身近な公共建築である学校建築への理解・関心を深めるべく、設計者が市民に向けて設計意図を説明するデザインレビューも開催します。このような取り組みを通じて、広く地域に愛される公共建築の実現に結びつけられればと思います」。

第1部 シンポジウム

第1部のシンポジウムでは「これからの学校」をテーマとし、教育関係の専門家、若手で気鋭の学校建築計画研究者とともに、学校建築が抱える課題とこれからのあり方について深く掘り下げられた。パネリストは伊藤俊介氏(東京電機大学教授)、高橋純氏(東京学芸大学教育学部准教授)、垣野義典氏(東京理科大学理工学部建築学科准教授)で、司会・モデレーターは小泉雅生氏が務めた。まずはパネリスト各氏からのレクチャーから始まり、その後意見交換が行われた。

伊藤氏は環境心理学の観点から教育施設をはじめとする各種建築の研究を行っている。デンマークへの留学経験もあり定点観測もなされている。レクチャーのテ

マとして「1.少子化・ICT・コロナ、2.ユーザーと設計者の関係、3.学校建築の役割」があげられた。そして「学校で学ぶのが良いという前提だが、ICTを利用した分散型も十分にあり得る」という氏のスタンスも述べられた。内容については、学校がなくなることで地域活力が低下し、結果としてコミュニティの存続に関わる点や、個別最適な学びの追求とICT導入によって小規模校のデメリットとされる点が問題でなくなることなどが語られ、これまでの「学校整備」から「学習環境の提供」への視点を転換すべきではとの提言がなされた。

またデンマークの事例から既存校舎の可能性が提示された。ICTにより物理的に分かれていてもオンライン上で「いっしょに」いる空間をつくることのできる。学校の空間が変わるのを待たなくても教育ツールで変えられる可能性がある。教育を変えるのは、やはり教育なのだ。そして建築は教育を変える力になるとの言葉も加えられた。

高橋氏は教育工学、教育の情報化に関する研究に従事。「学習指導・GIGAスクール構想について」をテーマとしてのレクチャー。その中でもGIGAスクールの事例紹介には驚かされた。すでにデジタルツールを活用できている学校では、児童がGoogleクラスルームなどを用いて今日やることを生活班で共有し評価し合い、学習到達状況を評価するルーブリックを話し合うチャットの存在や、共同編集+コメントで交流がなされていた。まさに大人顔負けの作業風景がそこには広がっていた。GIGAスクール構想は[環境の影響を受けて→まず児童が変わる→先生が変わる]という順で変化が起こるとのこと。

垣野氏のテーマは「未来の学校建築のつくりかた一日



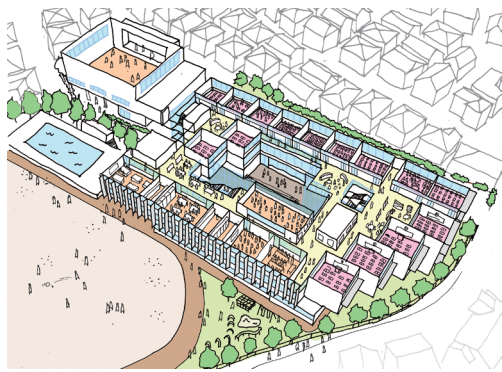
第1部シンポジウムの様子

撮影：山下祐平

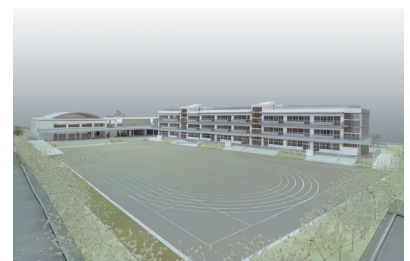


第2部デザインレビューの様子

撮影：山下祐平



小田原市立酒匂小学校内装木質化改修  
(設計：加茂紀和子／みかんぐみ)



横浜市立都岡小学校の模型写真(設計：八板晋太郎  
／八板建築設計事務所)

横浜市立上菅田笹の丘小学校のメインパス(設計：柳澤潤／コンテンポラリーズ)

本、オランダ、フィンランド、スウェーデンの学校を横断して」。フィンランドは2010年から「Finnish Schools on the Move—動く学校」をスローガンに、とにかく物理的に動くスタイルを取り入れているとのこと。45分間の授業内で児童を「休ませない」仕組みとしていくつもの課題があり、途切れない流れとなっている。また教室にはソファやラグがあり児童が自由に動き、寛ぎながら授業を行っているのも印象的であった。オランダの例では教室内のプランニングが紹介された。6つほどのコーナーが窓際や入隅を上手に使いながら教室内に散りばめられており、安定させる場所、集中力を高める場所などキャラクターの異なる空間が特徴的であった。

3名によるレクチャー後、会場も交えて質疑がなされた。「教室の今後、理想の教室とは？(日本の社会全体に通底する事柄も踏まえて)」との問いに対して、高橋氏の以下のような回答に共感を覚えた。OECDの報告書によると、欧米では、生まれながらに資質能力が違うのだから1人1人の能力を3cmずつ伸ばしてあげるのが教育。日本では、底上げ公平平等で努力主義であり、ある到達点に全員行かせてあげるのが教育。よってできる人ができない人の犠牲になっているとの見方もある。多くの児童をレベルアップさせるには、日本の現在の教室の在り方は有効かもしれないが、ラーメン屋さんですら個別化されている時代において(硬めや柔らかめなど)、学校だけが変わらないのはどうなのか。個別化によって新たに評価される子どもが出てきているのも事実であるとのことであった。

## 第2部 デザインレビュー

第2部では公共建築について建築家が市民への説明を行う「デザインレビュー」が行われた。冒頭の挨拶において、肥田雄三氏(横浜市建築局)は「横浜市の小中学校が今後約30年の間に384校が建て替えの対象となっており、コストを抑えながら良い学校をつくっていきたい」と述べられた。司会はJIA神奈川副代表の井上雅宏氏に代わり、柳澤潤氏(コンテンポラリーズ)、加茂紀和子氏(みかんぐみ)、八板晋太郎氏(八板建築設計事務所)の3名から神奈川県下で進行中(竣工済含む)の3つの学校建築について、プレゼンテーションが行われた。

柳澤氏は現在横浜市立上菅田笹の丘小学校という統

廃合の建て替えに取り組んでいる。周辺調査を大切に、既存校舎では顕著にあった表と裏を無くした学校をつくりたいとの説明がなされた。さらに特徴的なのは正門と南門を繋ぐ動線を軸に校舎中央に囲まれた庭づくり、その周りに図書室、多目的室、キッズクラブなどを配置していることだった。地域の人々が利用するコミュニティハウスの配置も外部からの利用を視野に繰り返されたスタディが印象的だった。

加茂氏は小田原市立酒匂小学校内装木質化改修。小田原市が行っている「公共建築物等における木材の利用の促進」事業の一環。地域産木材の活用のみならず、施設の有効活用を促すことも視野に事業を進めていくとのこと。15校ほどが対象となり年度ごとに行われている。特徴的なのは改修後にカタログが作成され、社会に対して発信を行っていること。今回の計画では約15㎡の材を用いて、学校内において効果的な木質化の場所(昇降口、長い片廊下、学年室、多目的室)などに焦点をあて改修がなされていた。

八板氏は横浜市立都岡小学校で2021年10月に着工。敷地は大きな幹線道路の角地。敷地内で建て替えを行い「風の学び舎、みんなの広場」がテーマである。2つの門を結ぶコモンストリートと幹線交差点近傍のコミュニティハウス、教室棟の風や光が通り抜ける「風の道」と名付けられた階段室が的確に配置されていた。

2部合わせて約3時間半にも及んだが、大変内容が濃く有意義なフォーラムであり、会場でご協力いただいたアンケートからも良好な反応を得ることができた。今回のフォーラムの様子はJIA神奈川のYouTubeチャンネルでも配信中なので、多くの方にぜひご覧いただきたい。

私自身が全体を通して特に印象的だったのは、伊藤氏が述べられた「今のプロポーザルの仕組みにおいて、選ばれる案は【良い案】ではあるが【革新的な案】は選ばれにくい。『現在』の視点が強く将来をあまり見据えていない傾向」という部分であった。これは学校建築に限らず、今の建築業界、または社会全体をも言い得ているようにも思えた。成長期が終わりを告げ成熟期とも言われている現代日本において、それでも建てる意義や「挑戦」というものが今でも求められているのか、時代が再び大きく変わる中で見極めなければならないと感じた。